

## メッセージアウトライン

### コリント人への手紙 第一4:1～5 「私をさばく方」

[1-2]「こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。この場合、管理者には、忠実であることが要求されます」

ここでの「私たち」はパウロ、アポロ、ケパ(ペテロ)といった福音を伝える教師、働き人のこと。彼らは派閥の長ではなく、主人であるキリストのことば、命令に従って働く「しもべで」あり、「神の奥義の管理者」である。「神の奥義」とは人間の側からは知ることができず、ただ神の啓示によって示される神のみこころ、神の救いの計画全体のこと。

「管理者」とは主人から委ねられたものを間違いなく保守、保存、保持し、取り締まる役割の者。そして管理者の資格としては、主人の心を心とする忠実さが要求される。

→創世記24章のアブラハムのしもべエリエゼルの例。

[3]「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さいことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしませんが」 1節は「私たち」と複数であったが、ここでパウロは自分自身のことにはじめて「私にとっては」と語っていく。彼はコリント人を名指しして、あなたがたの批判など意に介さない、あなたがたにさばかれることなど私にとって非常に小さなことに足りないことだと言っているのである。彼はひたすらキリストのしもべ、神の奥義の管理者として忠実に進むことを心掛けている。さらにパウロが「自分で自分をさばくことさえしませんが」と言ったのは、判断の主体が自分も含めて人間には全くないことを徹底的に知っていたからである。人間の判断はしばしば間違ふ。物事を誤解し、自分が世界の中心となり、高慢となり、人を憎み、さばき、決めつけ、あるいは自己憐憫に陥り、悲観し、生きている価値がないと絶望することさえある。しかし、最も大切なのは人間を造り、この世界を創造し、私たちの罪の贖いのために、ひとり子イエス・キリストをこの世に送り、十字架につけて死なせるほどに私たちを愛してくださる神による判断、判定なのである。私たちは自分で自分を決めつけてしまわずに、すべてのことを正しくさばくことのできるお方、イエス・キリストの神にそれをゆだねなければならない。

[4]「私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です」

他人の批判やさばきは不完全でしばしば間違っている。また自分が自分に下す判断も正確さに欠けることがある。それゆえパウロは自分に対するさばきは人ではなく、すべてをご存知の主なる神にゆだねているのである。

[5]「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主はやみの中に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する賞賛が届くのです」

もちろんはっきりと聖書の教えからそれ、人にも教会にも明らかに罪の認められる場合は、教会はさばきを行う必要がある。→Iコリント5:1～3、13、マタイ18:15～17

パウロがここで言及している「先走ったさばき」とは特に、パウロをはじめとする教師、伝道者たちに対する批判のことと思われる。そのような人々に対するかたよった判断こ

そコリント教会の争いの根だったのである。やがて主イエス・キリストが再臨される時にすべてのことが正しくさばかれる。その時に、私たちは隠していたことが暴き出されるような者ではなく、よくやった良い忠実なしもべだと、神からの賞賛をいただけるような者になりたい。そのために私たちはイエス・キリストにならい、みことばに忠実に従って生きていくことが大切である。